

2021

令和3年10月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻338号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



さわやか福祉財団

いきがい・助け合い サミット in 神奈川

ご参加ありがとうございました！

9月1日・2日に開催しました「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」は、コロナ禍の状況を踏まえ、オンライン視聴を基本に全国から3000名を超える皆様にご参加いただきました。全体シンポジウム、34の分科会、139の活動ポスターなど、大変で好評をいただくことができました。

ご参加・ご協力いただきました皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

全体シンポジウム



分科会



活動ポスター展示

集大成となる **第3回「いきがい・助け合いサミット in 東京」**は
2022年9月1日（木）・2日（金）に東京・品川で開催します。
ぜひご参加ください！

※詳細は決まり次第、本誌、財団ホームページ等でお知らせします。

とある言

2021年10月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

サミット御礼

同じ時間と空間を共有してつながる大切さ 清水 肇子

4 さわやか福祉財団の軌跡 真っ直ぐに、30年

寄稿7 地域を学び、羽ばたく自治体研修生

財団の事業を支える強力な助っ人

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

居場所を拠点に出会い・つながり、 自然に助け合える関係づくりを

高南の居場所 あえるもん（静岡県袋井市）

15 「地域助け合い基金」 状況のご報告／助成先のご紹介

21 移住 悪くないですよ 第10回

途上国支援から島の保健室へ 役に立てることを求めて

野澤 美香さん（愛媛県宇和島市・九島）

26 連載 9 老いの暮らしを創る

喪失との道連れ

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・

助け合いの地域づくり

30 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

33 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

35 NEWS&にゅーす

36 さわやか活動日記（抄）

㊦「基金」でご寄付のご案内／㊧財団ホームページリニューアルのお知らせ／㊨全国交流フォーラムのお知らせ／㊩みんなの広場／投稿募集／㊪さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内／表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・村上 和雄

サミット御礼

同じ時間と空間を共有してつながる大切さ

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

去る9月1日（水）～2日（木）にかけて、「いきがい・助け合いサミットin神奈川」を開催しました。一昨年9月の大阪サミット以来2年ぶり、2度目の開催となります。今回はコロナ禍を踏まえて会場参加とオンライン参加を併用し、3000人を超える熱いお気持ちの方々为全国からご参加くださいました。心より御礼申し上げます。

一方で、コロナの感染状況の収まりが見えない中での開催により、当初会場参加を予定されていた多くのパネリストや参加者の方々にも、直前でオンラインへの変更を再度お尋ねするなど慌ただしくお手数をおかけしました。また、オンライン視聴の配信による不具合があり、一部の皆様にはご迷惑をおかけしまして大変申し訳なく、改めてお詫び申し上げます。

お申し込みいただいた皆様に、素晴らしいパネリストの発言をしっかりと届けたく、11月に期間を定めて、全体会・分科会の再視聴手配をすすめています。お申し込み以外の分科会も視聴が可能ですので、ぜひこれからの活動に活かしていただけることを期待しています。また、サミットの内容は本誌次号でも概要を報告予定ですので、読者の皆様もぜひご覧ください。

今回のサミットでは、全体シンポジウム、34の分科会、そして全国からの139の活動ボスターもネット展示を行い、全体として大阪サミット同様に大変好評をいただいた。中でも、「遠方開催では予算がなく、参加もできず仲間づくりもできない。生活支援コーディネーターが1人だと常に孤独。今回はオンライン開催で参加できてよかった」など、オンラインだからこそ参加でき、情報をしっかりと得ることができたという声が多く寄せられた。一方でオンラインの効用を認めつつ、直接会えなかったのは残念だという声も同様に多く届いた。

「オンラインで済ませられることが多いとわかった上司も多く、外に出て行くことに疑問を持たれることが増えています。来年は、人を集めて開催することの必要性も伝えてもらえると助かります」。まさに、これはサミットの企画意図にある、つながり合うことの大切さに通じる。

元々人は、ふれあい、助け合って暮らしてきた。自己責任や自助の概念が強調され続ける中で、本来輝くべき一人ひとりの個性が、実は逆に押しつぶされそうになっている冷たい社会。これを何とか改め、いきがいを高め合える共助共生の社会をみんなの手で創ろう、そのためにつながり、学び合おうというのが開催に込めた基本の思いだからだ。

全体シンポジウムでは、総合地球環境学研究所所長の山極壽一氏から、「言葉はなくてもいい、同じ時間、場を共有することが大切」と、共感や信頼感の醸成について人類の進化を踏まえた提言がなされ、これも多くの反響を呼んだ。言葉、脳によるコミュニケーションに頼りすぎず、見る、聞く、食べる等の身体的な同調がとても大切なのだという。

多様性の時代とは、その多様性をそのまま放っておくことではない。認めることはつながり合うための前提だ。集大成となる来年9月に予定の東京サミットにおいては、住民主体で地域共生をすすめるための方策を共有し、誰もが輝ける未来への扉を皆で大きく広げていきたい。

真っ直ぐに、30年

寄稿 7

地域を学び、 羽ばたく自治体研修生 財団の事業を支える強力な助っ人

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

1991年11月にさわやか福祉推進センターとして創立以来、この11月で30周年を迎えることとなります。ここまで活動をすすめてこられたのは全国の本当に多くの皆様のご支援のおかげであり、心から感謝申し上げます。

30周年を迎える11月に向けて、さわやか福祉財団の軌跡を、特に今につながる活動初期の頃の事業や運営を中心にお伝えしてきました。いよいよ本シリーズも終盤です。今号では、当財団に研修派遣という形で在籍してくれた自治体研修生の皆さんの活躍ぶりを中心に紹介します。



さわやかインストラクターさんの助け合いの現場を研修で訪れる。後方で看板と旗を持っているのが当時の研修生（2003年）

住民主体の地域づくりを学ぶ

「さわやか福祉財団って、何ですか？　って最初は思いました（笑）」

毎年財団に来る自治体研修生の多くから、よくこんな話を聞いて笑い合う。誰でも次の異動先には不安と期待を持つものだが、特に公務員の皆さんにとって、民間の非営利組織となると驚いて当然だろう。

当財団では、毎年度、1年から2年を期間として、1～2名の公務員の皆さんを研修生として受け入れている。大きく分けて行政職員と、教育委員会からの学校の先生に分けられるが、他に法務省からも派遣していただいた。

元々行政や学校現場で鍛えられている優秀な皆さんであり、関心のある事業に他のリーダー職員同様に関わってもらっている。コロナ禍で現在は難しいが、出張も全国に出向き、プロジェクトによっては、企画から実践、予算執行まで責任を持って担っていた。公務員という立場では見えづらいものの、これからの地域づく

りに必要な住民主体の視点を直に学んでもらい、将来の職務で生かしてほしいというのが財団の一番の受け入れ目的だ。

主体的に考え、動ける職務環境を配慮

1997年、最初の研修生として、京都府から益田結花さんが参加してくださった。

「皆さんが笑顔で迎えてくださり、ほっとしました」と、当時何度か益田さんから聞いた記憶がある。突然の転勤で慣れない東京での一人暮らしは、さぞ緊張もしていたことだろう。しかしそんな不安はまったく感じさせずに、すぐに打ち解けてくれていた。

聡明で仕事も早く、何よりも財団の社会的役割をしっかりと理解し、またせっかくの研修機会を活かそうという姿勢が伺えた。初めての研修生で、どこまで何をやってもらえばいいのか、当初は皆も探りながらの状況。〃助け合いの地域づくりを自ら学び、生かしてもらう〃というそのままでの姿勢でいいのだということを、最初に確認できたことは財団にとって、とても大き

神奈川県地域支援事業担い手養成研修 事例②

おたがいさまネット全市にむけて（令和2年度・南足柄市）

おたがいさまネットとは

- ・ 地区に暮らす住民の有志が立ち上げた住民同士の助け合いの組織。
- ・ 生活の中の困りごとや不安なことを解決する暮らしのサポーターとして、地区住民の生活を応援する。
- ・ 南足柄市（4地区）のうち、岡本地区、南足柄地区で発足済。

残りの2地区におたがいさまネットを広げたい！

おたがいさまネット全市に向けて研修会を実施。助け合いの輪を広げていく。



Kenan Prefectural Government

5



神奈川サミット
・分科会で発表
の山本千恵さん。

かったことと思う。今改めて振り返っても、最初の派遣研修生が益田さんで良かったと思う方だ。財団の助け合い事業の中心的な役割を自然に担ってくださり、派遣期間終了時は、皆が本気で「あと1年どうですか？」と、無理なお願いをしていた。

続いて行政職では、神奈川県、北海道、長野県、愛媛県、栃木県、栄町、栗山町、矢祭町から派遣があり、今年度は神奈川県から沼崎未来さんが参加。神奈川県でいえば、「いきがい・助け合いサミットin 神奈川」で、パネリストとして山本千恵さんが登壇してくださった。現在、県の福祉子どもみらい局福祉部高齢福祉課の課長

派遣終了後も様々なつながり

「自治体からの派遣は、当時の五十嵐さんからの指示だったんですよ」と、社会参加推進事業を担当していたリーダーの蒲田尚史さんが振り返る。五十嵐純事務局長も蒲田さんも東京海上火災保険（株）（当時）からの出向者。「地域を学んでいただく場にと、折々に企業や行政に必要性を説きながら人材派遣を働きかけ、道を拓いてくれた。その後様々な人の縁を生みながら、1999年度からは、東京都教育委員会から先生方の派遣も始まることになる。

こちらは都の小・中・高・特別支援学校の管理職の選考試験に合格した人たちだ。この年に派遣されてきたのが、高校の先生である柳久美子さんと中学校の先生である中村豊さん。以来、

今年度の三上宗佑さんまで23年間、都の研修生を受け入れている。財団を卒業後は、副校長、校長、あるいは主要な教育行政の部局で重職を務めながら活躍されている。

古巣に戻ってからも、当財団の事業と関わりを持ってくれた方もおり、そのつながりで、特別支援学校の子どもさんたちの社会体験実習も受け入れさせていただくこととなった。

地域現場を学び、本業に生かし、 そして自ら実践へ

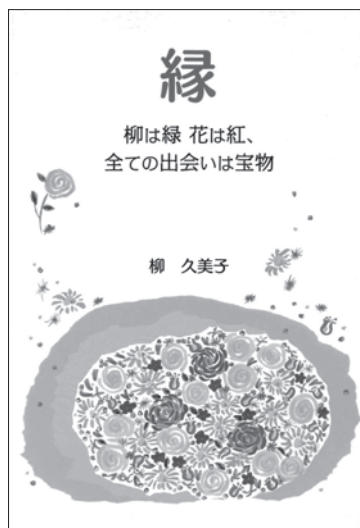
そして約四半世紀。最近では、異動の挨拶に加えて、少しずつ定年退職の挨拶状も頂戴するようになった。柳さんからは、ちょうど今年、定年を機に自費出版された本が送られてきた。

『縁』とタイトルが印刷されている。柳さんは、その後高校の校長として、また都の教育に関する研究会や審議会等の委員や東京都高体連の理事長など幅広い活躍をされ、直近では幼稚園の園長を務められている。こうした仕事の中にも財団での経験が大いに生かされたと綴られている。

る。ボランティア体験の大切さや、組織づくりの重要性、エネルギーあふれるボランティアアさんたちとの出会いなど、これは、多くの研修生が財団を通じて学びの成果として同様に話してくださることだ。1〜2年という短い期間ではあっても、地域の皆さんとのふれあいは長く心に残る。こうした人事交流がぜひさらに広がってほしいと改めて願う。



1999年に都からの最初の研修生となった柳久美子さん



中村豊さんも校長となり各方面で活躍されて定年後、2年にわたり当財団の事務局を支えてくださった。今は教育分野の非営利団体や区のエデュケーショナル・サービス委員として活躍されている。

また、神奈川県のエデュケーショナル・サービス委員会からも約10年間、教職の先生方が研修生として参加してくださった。2007年度の研修生である大坪直子さんは定年後に居場所づくりをすすめ、当財団の居場所ガイド作成も担当していただいた。

東日本大震災支援でも手腕を生かして大活躍

研修生の皆さんの希望にはできる限り添えるようにと思いつつ、年によっては大きな柱の活動がありそれが難しい場合もある。その一番が、東日本大震災の復興支援だ。

2011年以後数年間は全国のさわやかインストラクターさんと共に被災地支援一色となった。ゼロからの手探りで支援、遠方の沿岸部の被災地との往復を含め、震災直後の11年度の研修生は特に心身両面で大変な苦勞を背負っていただいたことと思う。財団の職員も皆必死だ

から、丁寧に事業や理念を説明しているゆとりもない。夜行バスや深夜の往復、物資支援でトラックに乗ったりと、例年の研修生とは大違いの環境だったが、まさに、これこそが地域。必要なニーズに即応する取り組み、できないことを嘆くのではなくできることを探す、という姿勢を学び取ってもらう機会になったことと思う。なんとか被災者の皆さんのために少しでも復興に尽くせればという思いを共有して、高い実務能力で見事に力を発揮してくれていた。

この年の研修生の一人、松村英二さんは、都教委派遣ということもあり、被災地支援とは別に、東京に避難されていた福島県外避難者の皆さんの支援を責任者として担当していただいた。原発問題や除染、賠償金など、他の被災地支援とはまた違う深刻な課題が山積し、様々に人間関係が絡み合う。財団の現職員であっても大変な難事業だったが、避難者の皆さんに誠実に向き合い、財団としての支援の枠組みを構築してくれた。財団を卒業後も、発足した「福島県被災者同行会」の取り組みを気にかけてくれて



福島県からの避難者交流会参加の皆さんと、写真中央は都から派遣の松村英二さん（2011年）。
幼いお子さんを連れて参加してくれた方もいた

いたが、ある日子想もしない連絡が届く。突然の訃報だった。まだ40代の若さで病に斃れたという。通夜に参列させていただいたが、多くの親御さんや教え子らしき子どもたちが涙しながら偲ぶ姿にこちらも言葉が出ない。

ある避難者交流会での光景が思い出された。閉会後の人気のない受付の陰で、高齢の男性を涙を流しながら慰めてくれていた。こちらに気づくと赤い目で控えめに笑顔を向けて、うなづいてくれた。心配ありません、というように。

今、財団で、ご支援をいただいた故人を偲ぶ「思恩忌」で、ご遺贈者の方々と一緒にはにかなだ笑顔の写真を飾らせていただいている。

* * *

研修生の皆さんが戻られる時、多くの方が「こんなにも真剣に地域を思い、助け合い活動を行っている人たちがいるということを、実感できたことが一番の財産です」と言ってくださる。これはさわやかインストラクターさんが各地で温かくまた厳しく導いてくれたおかげでもある。毎年、代わる代わる訪ねてくる研修生を、活動に追われる中で、時には息子や娘のように心配し、面倒をみてくださった。財団での研修成果は、まさに地域の皆さんの支えによるものに他ならない。

直接のかかわりはなくとも、会員として支援してくれていたたり、ふらっと顔を覗かせてくれたり、これもやはり人と人とのつながりがあればこそだろう。地域のすばらしい方々と出会った経験を生かして、ぜひそれぞれの立場で、さらなる活躍をしてほしいと心から願っている。

広げよう つなげよう

地域助け合い

活動の現場から



居場所を拠点に出会い・つながり、 自然に助け合える関係づくりを

高南の居場所 あえるもん（静岡県袋井市）

いつでも誰でも参加できる常設型居場所は、人と人がつながり、絆を育み、人が「共に生きる」ことの大切さを実感できる場所です。そんな共生社会の実現を目指して、今年4月、袋井市高南地区こうなんに開設されたのが、「高南の居場所 あえるもん」。地区住民とNPOの協働という新たな形の取り組みにも注目が集まっています。

（取材・文／城石 眞紀子）

★地区の課題解決のために
★住民自ら居場所づくりに着手

静岡県西部に位置する袋井市。かつ

てこの地には、誰もが気軽に立ち寄れる常設型の街の居場所「もうひとつの家」があった。主宰していたのは、1995年から助け合い活動に取り組ん

できた「たすけあい遠州」。利便性の良いJR袋井駅前のビル1階にあり、「いつ来ても、いつ帰ってもいい」がコンセプト。誰もが自由に過ごせるこ



の場所は、子どもから高齢者まで多くの人の出会いとつながりの場となっていて、助け合う関

係も広がつていた。

新型コロナウイルスの
感染拡大で
活動自粛を

れ、このま
ま家賃を払

寄付をして
くれる皆さ
んの気持ち
を無駄にし
てしまうこ
とになると、
昨年5月、

20年以上続けてきた『もうひとつの

家』を閉じました。そしてこの1年は
 気になる方のお宅へ手作りの昼食を持
 参して出向く、出前居場所^{デ・ジャ・ヴィ}や、青空

ど、コロナ禍でもできることをと、変化を試みながらふれあい活動を続けてきました」と話すのは、当財団の評議員でもある、たすけあい遠州代表の稲葉ゆり子さん（79歳）。

その稲葉さんも開設に参加して新たに立ち上がったのが、「高南の居場所あえるもん」だ。

高南地区は、JR袋井駅から徒歩12分にある人口約3500人の閑静な住宅街。50年ほど前に住宅用地として開発され、近年は少子高齢化が顕著に進んで中心エリアの高齢化率は40%を超えている。こうした実情の中、「このままでは高南は廃れてしまう」との危機感を持った住民有志8人が「高南

「エリアまちづくり研究会」を発足し、

地域の課題を洗い出し、まちづくりの方策を考えようと勉強会を重ねてきた。

「その課題解決の提案をまとめようと
考えていた矢先に、『もうひとつの

家』が閉鎖になり、高南地区にも行き場を失ってしまった人たちがいると聞きました。それで、まずは日常的に集まれる居場所づくりから始めてみよう」と動き出すことに。活動の主旨を理解

★ ★
たくさんの共感と支援を得て
スピード開設を実現

居場所の実現には、場所・資金・ボランティアスタッフの確保が必要とな

る。そこで、実現する会ではまず場所探しから開始。20年6月から公共施設の空き家借入の可能性について市担当課および管財課と協議を始めたが、不許可という結果に。幸い、並行して調査・選定を進めてきた地区内の空き家や空き店舗から、「使ってもらってもいい」という物件が見つかり、昨年11月中旬に賃貸契約を結んだ。

「残る課題は、資金とボランティアの確保です。借り受けた空き店舗は40年以上使っていなかったため、改修工事が必要でした。さっそく、居場所に関する案内パンフレットをつくり、自治会の協力を得て班内回覧で資金協力を依頼するとともに、ボランティアスタッフの募集も行いました」(宮内さん)

その結果、地区住民から寄付金120万円、預け金160万円が集まり、運営を担うボランティアスタッフは団塊の世代を中心に30数名を確保。当財

団も住民主体の地域づくりをすすめる事例として支援し、その情報を共有させていただいている。

「預け金というのは、開設2年後に返金する約束で集めた基金で、企業でいうところの借入金です。立ち上げ当初は、この資金集めがうまくいくかどうかまいったく見通しは立っていなかったのですが、『いいことだから応援するよ』と言ってくれた方が少なからずいたことに、とても勇気づけられました。家計に響かない程度の金額で5000円から1万円、多い方でも2万円ぐらい。『薄く広く』を目指し、全1200世帯の1割を超える世帯からご支援いただくことができました」(宮内さん)

また、改修工事も業者任せではなく、「自分たちでできることはやろう」と清掃や壁塗りなどの修繕を手伝ってくれる作業ボランティアを募ったところ、

たくさんの方が手弁当で駆けつけてくれたそう。室内に揃ったテーブルもいすも戸棚も鏡も、すべて地区の人からの寄付。協力者の中にはそれまで「もうひとつの家」に行き、関わりを持ち、「お世話になりました」という人たちがいて、長年にわたる地域活動が、新たな居場所への理解と共感につながったことは想像に難くない。こうして構想から1年足らずのスピードで、21年4月、商店街の一角で「あえるもん」はスタートした。

★NPOも地域の中へ ★地区住民と助け合いを広げる

開設から半年。あえるもんは、その名の通り、「ここに来りや、誰かにあえるもんねえ」とばかりに、いつでも誰でもが気兼ねなく集い、ふれあい、語り合う居場所としてにぎわいを見せている。



(上) 利用者は思い思いに自由に過ごす

(下) 日替わりのランチは300円。月に2回は手打ちそばの日も

「スタッフが交代で常駐し、お茶を出したり、ランチを提供。土曜日は子ども食堂も開いています。利用者は0歳～90代までと幅広く、1日の来場者は30～40人。地区の人だけでなくちよ

と離れたところからもランチを食べに来てくれたり、子ども食堂の日には若い人たちも家族で来てくれたり。コロナ禍の中、慎重に活動を進める場面もありますが、皆さんに自由に、楽しく

過ごしていただいてます」というのは、あえるもん代表の中村邦子さん(69歳)。

開設には、居場所運営の経験者である「たすけあい遠州」のメンバーがサポートに入り、食事作りや来訪者への対応等、あらゆる場面で協働。「もうひとつの家」に来ていた人たちも足を運んでくれている。「ここができて一番喜んでるのは、私たちスタッフかもしれません。新たなつながりが生まれ、楽しい自分たちの居場所にもなっています」と中村さんが言えば、副代表の丸岡孝太郎さん(70歳)は「私の趣味はスタッフの皆さんの喜ぶ顔を見ることです」と言い、得意の日曜大工や電気工事の技を生かして、「こんなものがあつたらいいな」というみんなの願いを叶えることで日常的に応援。また、居場所に来た人たちも気になる人に声をかけるなど、助け合いや見守りも生まれ始めている。降り出した雨の中、手に大荷物を抱えた女性が帰ろうとしたら、「よかつたら送りますよ」と声がかかり、車で自宅まで。認知症の人がタクシーで来てしまったときには、「帰りは送るよ」と申し出てくれた人もいた。そうかと

思えば、母親が不在中で泣き止まない1歳の男の子を、何人ものおばあちゃんたちが代わる代わるに抱っこしてあやしたり。そういうびっくりするようなことがすずでに起きているという。

居場所の効用について稲葉さんは、「居場所があるとそこが拠点となって、人が出会うだけでなく、それぞれがお互いに気になる存在になって、口を出したり、手を出したり、耳を傾けたりして小さな助け合いが生まれやすくなるように思う」と話し、こう続けた。

「これまでは自分たちの思いでNPO団体を立ち上げて活動してきましたが、今回、機会を得て地域と協働をしてみたら、



(手前右から時計回りに)「あえるもん」代表の中村さん、同副代表の稲葉さん、丸岡さん、「高南に居場所を実現する会」会長を務めた宮内さん

地域には素晴らしい人材がたくさんいることがわかりました。また、地域担当の2層生活支援コーディネーターは日常的に顔を見せ、当たり前のよう情報交換ができる状況。『ここに来れば大丈夫よ』と、高齢者を連れてきてくれる地域包括支援センターの職員もいて、行政ともつながりができました。そうした中で気づいたのは、NPOも地域の中で自分たちの活動を生かすほう

が広がりができて、思いも助け合いも広がっていくのではないかとということです。全国各地で活動する仲間にもそのことを伝えていきながら、これからもみんなで楽しみながら活動に取り組んでいきたいと思っています」

身近な居場所だからできることを、その実践から今後も発信していただきたい。

高南の居場所 あえるもん

袋井市高南地区で、常設型の居場所を開設する住民ボランティア組織。高齢者らが孤独感から解放され、居場所を訪れることにより同じ境遇の仲間と出会い、生き生きとした日常生活を楽しむことのできる場所の提供を第一の目的に、支える人も、支えられる人も共に幸せを感じられる共生社会の実現を目指して活動している。開設時間は火～土曜日の9:30～16:30。火～金は300円のランチ、土曜日は子ども食堂(小中学生は無料・その他は200円)も行っている。

●連絡先／〒437-0037

静岡県袋井市清水町15-10

電話 090-7027-9864

(副代表・稲葉氏携帯)

「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

9月15日までの状況をご報告いたします。

◎寄付受付額

198件 3045万6700円

このほかに当財団より9千万円を供出

◎助成実行額

571件 7714万4897円

(9月15日 当財団ホームページ開示時点)

皆様のご寄付によって活動を始めることができた、あるいは活動を継続することができた団体・個人の方々からは報告書とともに感謝の言葉が届いています。いくつかご紹介させていただきます。

◇助成金で食料を購入しお渡しすることができ、とても喜ばれた。現在は多くの地元の

市民や企業、団体、学生さんが活動を理解し協力してくださっています。

◇助成金で感染予防の品を買い、コロナで休んでいたサロンも再開しました。皆さん待っていてくださって全員参加してくださいました。

◇子どもから高齢者まで、異年代の方たちが訪れており、交流の場づくりの第一歩は踏み出せた。ボランティアさんは、「ここに来なければ会うことのなかった人たちと出会えることが楽しい！」と言っておられます。

* * *

地域共生社会を実現するために必要な活動が継続されるよう、引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。

(事務局長・内田)



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関する
ご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」 助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号は、サロンから始まった有償ボランティア活動、困窮家庭への食事支援、不登校の子どもと保護者への支援に対する助成をご紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、ぜひ全国のさまざまな活動をご覧ください。

埼玉県川越市

サロンから有償ボランティア活動開始 柔軟な対応で住民が助け合い

ふじくら たすけあいの会

助成金額 15万円

「ふじくら たすけあいの会」は2018年4月に活動を開始した、地域内の住民相互の有償ボランティア活動団体

です。取り組み内容は、庭の草取り、植木の手入れ、買い物支援・通院補助、話し相手などです。地域内の活動のため、支援者と調整がつけば、時間や曜日も比較的柔軟に対応できるのが特徴、とのこと。

活動を始めたきっかけは、サロンでの集まりでした。サロン会員たちが地域内の簡単な「さりげない見守り」役を担ったところ、「自分たちでも地域課題を解決できる」という声が上がリ、発足することになったということです。「できる人が、できる時に、できることを」をキャッチフ



レーズに活動しています。また、「助け合い活動をしたいので教えてください」と声をかけられて、他地区で実践報

お手伝いしたお宅の庭先でひと休み。

「ふじくら」は、利用者とのコミュニケーションと安全を重視して活動している

告等も行っています。「『じゃ、やってみようか』という声をうかがうと、こちらもうれしくなります」とのことです。

ソフト面は充実してきたという「ふじくら たすけあいの会」。5年後を見据えた体質強化のためにハード面を整えたいと、本基金の助成金は「環境等を整えるために活用していただきました。これからも「元気ですか？ 何か気になることはないですか？」を合言葉に軒先訪問を行い、「ふじくららしさ」を出して活動していくそうです。

神奈川県藤沢市

こども食堂が

コロナ禍の困窮家庭に食事支援

長後こども食堂

助成金額 20万円

長後こども食堂は2017年1月に活動を開始し、月1回、地域の食卓としてこども食堂を開催するとともに、地域の活性化にもつなげたいと、流しそめんや餅つきなども実施し、買い物支援も行ってきました。一昨年のハロウ

イン企画では、地域の商店の協力を得て開催した結果、500名が参加してくれたということです。

コロナ禍の影響を受けている家庭に対して、夕食と学校給食が始まる前までの

昼食支援を無料で行いたいとのことで、昨年、本基金に応募していただきました。お米の使用が増えたため、助成金はお米や食料、食事の容器、炊飯器の購入、光熱費等に充てられました。

利用した家庭から「1食分の食費が浮くのはとてもあり



長後子ども食堂の食事支援の様子

がたい」との声が届いたほか、昼食支援を実施したことで、新規のこども食堂利用者や初めてボランティアとして参加してくれる人が増え、つながりができたそうです。また、食料の寄付や募金の協力、子どもたちにアイスクリームを配ってくださる方もいて、とても有意義な活動だったと報告してくださいました。

「こども食堂は貧困家庭が対象と思われがちですが、当こども食堂は地域のどなたでも利用可能としているので、何かしらの理由で困っている方はもちろん、そうでない方も大歓迎です!」とのこと。「今後は、他の地域で出張こども食堂も行えたら」ということです。

大阪府高槻市

コロナで急増した不登校への相談支援に 本基金を活用

一般社団法人はらいふ

助成金額 15万円

「はらいふ」は2013年の設立以降、不登校の10代の子どもたちに自由な学びの場をつくり、さまざまな体験活動

・学習・食事提供等を行ってきました。また、自力で通うことが難しい子の車での送迎、課題を抱える子や家庭への福祉的支援（他機関と連携したソーシャルワーク）なども実施しています。

昨年、コロナによる休校明けと夏休みに不登校の子の保護者から相談が増加し、不登校の親の会立ち上げや困難ケース対応のために週1回程度、専門職スタッフを活用するようにしたこと、また、居場所活動における消毒等の費用が増加しました。「親の会実施や相談機能拡充で、不登校の初期対応について多くの保護者と一緒に考え、保護者の方の子育てへの不安を解消し、地域の中でその時々の方のごとを継続的に相談できる拠点となっていく」として本基金に応募、助成金は専門職への謝金や、居場所用消耗品・衛生用品に活用されました。「本助成を活用し、活動を継続することができました」との報告をいただきました。

今後については、「不登校の子どもたちの居場所は不足しています。当スクールにもたくさんのご相談が寄せられ受け入れをお待たせしている状況があります。子どもたちが安心できる場所を増やしていきたいので、可能であればご支援いただければ幸いです」ということです。



はらいふが運営する「フリースクールはらいふ」の様子

「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

3. ご寄付の方法

（1）銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

（2）郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、一言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

（3）クレジットカードによるご寄付

15ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問合せ>
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

移住

悪くないですよ

第10回



途上国支援から島の保健室へ 役に立てることを求めて

野澤 美香さん（愛媛県宇和島市・九島）

看護師としての道を歩み始めて以降、「もっと役に立てることはないか」と自らに問い続け、活動してきた野澤美香さん（61歳）。途上国の人々を支援し、助産師となつてからは、日本国内でたくさんのお母さんと赤ちゃんを愛情いっぱいに見守ってきました。今は、移住先の愛媛県宇和島市・九島にある「島の保健室」で、島民の健康を願いながら活動しています。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

「何か人の役に立てないか」 医療職として途上国支援の道へ

野澤さんは、三井鉱山で栄えた岐阜県飛騨市神岡町栃洞に生まれ育った。高校卒業後しばらくして、住居も提供されるということで、病院で午前中と夜間は看護助手として仕事をし、午後は通学しながら



野澤さん。島の保健室入口にて





1999年、コロンビア・キンディオ地震の救急援助の様子（手前右が野澤さん）

ら准看護師、正看護師の資格を続けて取得。以降、京都の救急病院で看護師として勤務しながら救急救命士の資格も取得したが、その頃から「資格を生かして途上国の役に立てないか」という思いが芽生えた。

1997年に青年海外協力隊の看護師隊員としてラオスに派遣されたのを皮切りに、NGOを通じて難民支援でコソボやアフガニスタンへ。自動小銃を手にした兵士が監視する国境を歩いて越えたり、女性一人では外出できないような地域で間近に銃撃戦を目撃したりもした。

「日本の医療だったら助けられる下痢や肺炎で亡くなってしまう人がたくさんいました。そして、何の罪もない市民が逃げまわり、あどけない子どもが敵への憎しみを口にする。不公平さや理不尽さを

痛感する経験でした」

その後も、JICA（独立行政法人国際協力機構）の国際救急援助隊として、コロンビアやイランの大地震の現場に赴いた。

自らも厳しい環境に身を置き、言葉が通じない中で通訳と一緒に人々を支援するこれらの活動で、心身の健康を損なう援助隊員は多く、野澤さんもその経験をした一人だ。そんなときに支援してくれたのは、日本から現地に派遣されている医療調整員で、「今度は自分がその役割を担いたい」と考えた野澤さんは2006年から3年間、カンボジアで24時間携帯電話を肌身離さず健康管理員として活動。求められればどこへでも駆けつけ、隊員を支援した。

○ 助産師として母子を見守る

02年、野澤さんは名古屋大学医学部保健学科3年次に編入。さらに学びを重ねて、助産師と保健師の資格を取得し、名古屋市内の産婦人科病院に助産師として勤務するようになった。今度は、人



の幸せに立ち会う仕事。生命が誕生するプロセスは決して簡単なものではないが、生まれてきた赤ちゃんとそのお母さんたちに関わる仕事には張り合いがあった。出産を終えて退院していくお母さんには「いつでも連絡してね」と、電話番号とメールアドレスを渡した。赤ちゃんに何かあれば、「自分が悪い」とすべて抱え込んでしまうお母さんたちが心配だった。

仕事の域を超えてお母さんと赤ちゃんを見守り、励ましてきた野澤さんとお母さんたちとのつながりは、移住した今も続いている。

「今でも、お母さんたちはいろいろなことを相談してくれたり、子どもの成長を知らせてくれたり。そういう絆が本当にありがたくて、私のほうが救われているんです」

最近は町のクリニックで出産することが減り、産科は大きな病院に集約される流れとなっている。野澤さんが勤務していた病院も、野澤さんが59歳のときに産科は廃止して婦人科を残す形となり、野澤さんはそれを機に退職することにした。

「定年には少し早いけれど、好きな旅行でもしてゆっくりしようかと。でも、いざそういう生活を始めてみたら全然楽しくない！（笑）そして、医療に困っている島があるなら移住したい、と思うようになりました」

一貫して野澤さんの中にあるのは、「何か役に立てないか」という思いのようだ。

◎ 縁が重なって、島の保健室に

19年、看護職を求める地域おこし協力隊に応募するなどして移住先を探し始めた野澤さん。大阪で開催された愛媛県移住フェアに参加したが、お目当ての松山市がその日は不参加。係の人に「せっかくですから」と勧められてブースをひとまわりし、最後に話を聞いたのが宇和島市だった。

そして後日、野澤さんの希望を聞いた宇和島市の移住担当職員から「野澤さんに合う移住先は宇和島に2か所ある」とメール連絡が来た。1つは他の島の診療所の看護師、もう1つが人口800人あまりの九島で開所することが決まっていた

「島の保健室」で、島民の健康管理に携わる保健師の求人だった。2つとも移住者を募集していたわけではなく、メールをくれた職員が、野澤さんの資格と経験を生かせる求人が島にないかと探してマッチングしてくれたのだ。部署を横断して移住者を歓迎しようとする、市の熱意がうかがわれるエピソードだ。1日に2か所で面接する段取りもつけてくれた。

「お通路さんをもてなす文化なのか、『何かしてあげたい』という気風があるのだと思います。役所の方々も両方の島の方々も、なぜこんなにまで親身になってよくしてくれるの？というくらい本当に親切で」と野澤さん。

「移住フェアで宇和島市の話を聞かなければ、そして、島の保健室の募集時期でなければ私は今ここにいないと考えると、縁というものは不思議ですね」

○これが私の本当にやりたかったこと

九島では、16年4月に四国本土（宇和島市）と

の間に九島大橋が完成すると同時に、小学校は閉校となった。

その小学校の旧校舎を活用して、若い母親と子どももの集いの場や、音楽室をそのまま生かしたレス

トランなど、島民の居場所や雇用を創出している。これらは、宇和島市が地域力を向上させ、地域共生社会をつくろうとする市を挙げての取り組みの一環で、島の保健室もその一つだ。

野澤さんは保健室に常駐し、毎週金曜日にはボランティアの人たちが旧小学校の調理室で配食のために作ったお弁当を持って、気になる人の家を訪問する。高齢者は我慢強く、つらくても助けを求めないことがあるので、訪問して話をしながら、必要な場合は医療や介護につなぐ。また、漁師町



お弁当を手に高齢者宅を訪問する野澤さん（右）



島の駐在所のお巡りさんも参加している、島の保健室主催「小高島夕焼けサロン THE 男塾」の活動。写真は、弘法大師ゆかりの鯨大師を皆で訪れたときの様子（前列左から3人目が野澤さん）

の九島の人たちには、いつもの場所にいつもの顔ぶれで何となく集まり、海を見ながらまつたりする「たまり場文化」がある。そういうところに顔を出してみたり、訪問販売

が来る場所に自転車で行き、家から出てくる人たちと一緒に買い物しながら話したりする。もちろん、赤ちゃんが生まれれば見守りに顔を出す。そんな活動を重ねるうちに、今では道で会う人が「あ、ちよっとちよっと野澤さん」と手招き。「あそこの〇〇さん、見に行つてあげてくれる？ 何だか大変そうだから」と教えてくれるようになった。

昔から、ご近所のつながりがとても強い。そし

て、皆さんつつましく暮らしながらも本当によく笑うし、海の近くで話すせいか声が大きい（笑）。一緒にいるとこちらも気持ちが悪くなくなる、九島はそんな島です」

* * *

九島に来て1年半が経った野澤さんに、これらについて聞いてみた。

「途上国に行つてわかつたのは、なければならぬ何とかなるものだという事です。これからの地域も、今ある人とモノでできることがまだあると思いますし、それを少しずつでも探していきたいですね」

「私が本当にやりたかつたことが、今やれてます。移住を決意したのも『これで終わつていいの？ 何かもつとお役に立てるんじゃない？』という思いから。そして、私もこれからきつと支えられる側になるけれど、支える人も支えられる人も、当たり前前に楽しく暮らしていければいいなと思います」

野澤さんの満ち足りた笑顔が印象的だった。

老いの暮らしたを創る

喪失との道連れ

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

8月の半ば、突然、右の股関節周りに鈍い痛みが出てきました。私は股関節の手術を3回しており、両側とも人工股関節です。両方を手術した結果、対のものが対になったという感じに実際に調子がよくなり、ここ十数年、何の問題もなく過ごしてきました。それなのに、また痛みが。

しばらく様子をみていましたが、一向に痛みは消えません。またまた手術かとドキドキしながら診察してもらった結果、「股関節は何でもないよ。すべり症があるね」とのこと。確かにレントゲンにはガクンとずれた背骨が映っていました。やれやれまた病気が一つ増えたかと、年に1枚ずつ診察券が加わるような年齢を、改めて実感しました。

私には年5回、手術記念日が巡ってきます。股関節に加えて大腸がんと胃がんの手術をしています。大腸がんは自分で見つけました。というのも私には毎朝、自分の落としたものを確認する習慣があり、ある朝、明らかに鮮血とわかる付着物を見つけたのです。ちょうどその時、人間ドックの検査をする予定が入っていたので、すぐ先生に連絡しました。「ドックでも腸の検査をしますから、腸だけにやりましょう」と手筈を整えてくれました。

「いやー、村田さん、悪い顔したヤツがいますよ。人間ドックどころではありません。すぐ手術して下さい」という宣告。あれよあれよと言う間に手術の運びとなりました。定年間際でしたが、まだ山ほどの仕事を抱えてい





ましたので、ともあれ職場に報告。反応は3パターンありました。「がん？ そんなことないよ。ポリープだろ。俺だつてあるよ。そんなの大丈夫、大丈夫」と、本人ががんだと言っているのに否定し、やたら明るく反応する人。「エーッ、がんですか。どうかお大事になさって下さい」と、声のトーンが次第に低くなりうなだれていく人。気を張っていたこちらの気持ちも萎えていきました。「エーッ、どうしてわかったの。どんな手術をするの、どのくらい入院するの？」と次々と質問を浴びせ、根掘り葉掘り聞く人。圧倒的に女性です。これは有り難かったですねえ。何かと聞いてくれることによって気持ちが癒され、落ち着いてきました。そして3年前には胃がんの手術。幸い早期発見で、胃カメラによる剥離術ですみました。

5回の手術経験は、決してマイナスばかりではありません。失っていくものを素直に認

めることが出来るようになったのです。今まで出来ていたことが出来なくなる自分を発見することは、つらいものです。しかしどう頑張っても、自分の力では乗り越えられない壁があり、認めなければならぬことだった。たくさんあります。それを受け入れ、新たな自分と向き合って、もう一度人生をつくり直してみようと思える術を、早くに身につけるとができました。

老いは喪失との道連れ。私は50代で、失うものを受け入れる心の準備をすることができました。さらに有り難いことに、5回の手術ともそれほど気が減入ることなく、かなり心の平静を保ったまま乗り越えられました。どうやら私は母親の胎内に「深刻」という因子を置き忘れてきたようです。

とはいえ80歳を超え、すべり症という新しい敵に直面しています。いくらなんでも6回目の記念日はねえ。勘弁してくださいな。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

財団ホームページを リニューアルしました

このたび、当財団のホームページを完全リニューアルいたしました。

より見やすく、新しく、財団の活動と皆様の助け合いへの参加、遺贈・寄付についてわかりやすく説明しています。



ぜひご覧ください！



創立30周年を迎えるさわやか福祉財団に、
どうぞこれからもご支援をよろしくお願い申し上げます。



公益財団法人
さわやか福祉財団

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

●新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

●その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





新地域支援事業・

各地の動き

(2021年8月1日～31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

生活支援コーディネーター・ 協議体と連携

軽米町(岩手県)

2日/岩手県のアドバイザー派遣事業として、軽米町のモデルとしての居場所づくりを当財団が支援。同町では昨年度から、フォーラムや住民勉強会、協議体の勉強会を重ね、助け合い創出

に向けて動いてきた。まずは「共生型常設型居場所」を立ち上げようと、今春から場所探しをし、空き家が見つかった。勉強を重ねるうちに協議体メンバーが居場所を立ち上げたくなったのだが、協議体は立ち上げ支援をするなどの仕掛け人ということで、実行委員会として関心ある人などの有志が集まり、そこに協議体でも関心ある人が入って進めていくということになった。

この日の勉強会では、実行委員会から「いつでも誰でも型」を立ち上げた事例を紹介してほしいとのリクエストがあり、静岡県袋井市の高南地区の「高南の居場所あえるもん」の事例を通じて考えてもらうこととした。

まず、中里早苗生活支援コーディネーターからこれまで学んできた「いつでも誰でも型」の理念等について説明。協議体と実行委員会、居場所の核メンバー、居場所に参加する人の関係を図解にして伝えていた。

財団からは、住民主体で、人、モノ、

お金について話し合いながら立ち上げていった「あえるもん」の様子を説明した。意見交換では、実行委員会と協議体の関係、お金の集め方などについて質問が出され、再度整理した。

今後は実行委員会が議論を重ね、協議体(結つこの会)がバックアップしながらモデルとなる「いつでも誰でも型」居場所を立ち上げていく予定。

(鶴山)

三浦市(神奈川県)

4日/当財団が以前より関わっている三浦市から神奈川県のアドバイザー派遣制度を利用した個別支援の希望があり、長瀬、沼崎が訪問。昨年、計画していた協議体編成に向けた勉強会はコロナ禍で実施できていないこともあり、今後の展開などを協議した。今回の協議内容を踏まえ、本事業推進に向けて引き続き協力することを確認した。

(長瀬)

阿賀野市(新潟県)

3日/阿賀野市の協議体と生活支援コ

ーディネーターや行政など関係者の勉強会「協議体全体会」があり、当財団がオンラインで講師を務めた。同市は2019年から体制づくりに取りかかり、目指す地域像の実現に向けて2層4圏域で拠点となる居場所を立ち上げた経緯もあり、今年2月に行った勉強会では、その状況を踏まえ、次のテーマとして有償ボランティアを財団から提案しながら基本を伝えたところ、再度、有償ボランティアの理解を深めたいと今回の「協議体全体会」が企画された。この全体会開催にあたり、各協議体で、「有償ボランティアについてイメージや課題、全体会で聞きたいこと」などが話し合われており、その情報も含めて市の担当や第1層生活支援コーディネーターと企画した。

プログラムは、まず第1層生活支援コーディネーターと行政から、有償ボランティアの必要性を考えるため「阿賀野市の高齢者の現状と生活・移動支援のニーズについて」として話があった。続いて財団から、有償ボランティア

アの必要性を再確認し、その手法を学んでもらうために「助けてと気軽に言える地域を目指して」有償による助け合いの方法を学び合おう」と題して講演を行った。住民のニーズに応じて多様な助け合い活動を広げている事例や町内会単位で取り組んでいる事例など、多様な事例を紹介した。その後、各協議体に分かれて、そのためにできることは何かを考え、発表してもらった。

終了後アンケートでは、「時間をかけて知ってもらうことが必要」「困りごとを抱えている人に『助けて』と言っているんだということを十分にわかってもらえる機会をつくっていく必要があると感じた」「町内会での立ち上げの事例を聞き、これだ、と思った。大きすぎても大変なので、町内会がベストと思った」などの感想が寄せられた。

おおい町(福井県)

(鶴山)

23日/「令和3年度 おおい町地域支援合い活動推進協議会」が開催され、

当財団も協力。「地域支援合い活動推進協議会」は町内2圏域に編成された第2層協議体で、今年度第1回目となる今回は「合同研修会」として開催された。新たに構成員となった方もいるため、まずは町および第1層生活支援コーディネーターから「町の現状とこれまでの取り組み」の報告、第2層生活支援コーディネーターの2名から「各圏域での取り組みと今後の展開」についての報告があった。続いて財団から、「第2層協議体の役割と具体的活動内容」を説明した。その後、圏域別の2グループに分かれ「住民主体の活動を進めていく上で協議体はどのように取り組んでいくか」をテーマにグループワークが行われ、多くの熱い意見が交わされた。

コロナの影響もあり、少し停滞感のあった第2層の取り組みだったが、今回の研修会をきっかけに一歩前進し、助け合い活動の一層の充実に取り組んでいく予定である。

(高橋)

協議体編成のための
研修会・勉強会等に協力

大野市（福井県）

2日／大野地区の第2層協議体設立に向けた「地域支え合いを考える会」の第4回目が開催された。第2層生活支援コーディネーターからの「振り返り」に続き、当財団からは「住民が中心となる協議体の役割」について他の自治体の第2層協議体の活動事例と具体的な活動創出手法を伝えた。集まった約20名の住民によるグループワークでは、「協議体にはどんな人がいたらいいか」について4グループで話し合った。開催後のアンケートでは、協議体への参加希望についても記入してもらい、今後、手上げたメンバーを中心に、できるだけ早く同地区の第2層協議体を編成していく予定である。（高橋）

生活支援コーディネーター
養成研修等に協力

茨城県

11日／茨城県で生活支援体制整備事業に係る研修がオンラインで開催され、当財団は講師として協力した。

この企画は、同県の県庁・県社協の関係者とともに、県レベルのバックアップの実践として構成を協議している。今回は特に、本事業の新任者を主な対象として、制度の考え方など基礎的な説明に重点を置き、情報提供した。この研修を踏まえ、県では1か月後に現任者も含めた実践編の研修の開催を予定。また、その後の生活支援コーディネーター連絡会などの計画も調整中で、同県では充実した県レベルのバックアップが実践されている。（長瀬）

埼玉県

3日／埼玉県西部ブロック生活支援コーディネーター連絡会に72名が参加し、当財団もオブザーバー参加した。3つのテーマ①オンラインの活用、②移動支援・移動販売、③新しい生活様式を取り入れて再開・開始した取り組みについて、発表者からの実践報告後、グループに分かれて各自の現状を情報

共有した。

まとめて財団から、オンラインの活用については、LINEのグループチャットを活用した協議体例や、協議体委員が公民館等からZoomで参加できる環境を設定するなどの工夫を紹介した。移動支援・移動販売については、コロナ禍で乗り合いの移動支援が難しくなってきた中、ネット注文、自動電話注文のやり方を協議体で学んだり、注文を一緒に行う等の取り組みも見られるようになってきていることを話した。新しい生活様式については、屋外での集いの場が増えており、ラジオ体操はとて多いこと、ガーデニングを紹介した集いの場合は、それを話題にしたあいさつ、その後の様子見、草取りなどで自然に集まる機会をつくることのできることで、おすすめであること話をした。（岡野）

（本稿は、岡野貴代、高橋望、
鶴山芳子、長瀬純治）

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2021年8月1日～8月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(60件)

(都道府県別50音順)

北海道	正岡 太郎	石井 孝彦
小笠原 一造	埼玉県	伊東 雅子
小田 桂子	石川 晶一	岩田 典子
澤出 桃姫子	佐藤 清勝	石見 光夫
末澤 勝典	柳原 聡美	小荷田 肇
竹腰 久留美	千葉県	高田 富士雄
宮城県	石井 敏夫	永田 美樹
小野寺 寛	関 義信	平間 嘉子
福島県	高梨 健一郎	山本 学
三浦 彰	中戸 幹郎	神奈川県
茨城県	堀内 正範	池谷 満
津田 敬子	森川 和子	内田 友昭
渡辺 英勇	東京都	大賀 進
栃木県	池崎 芳博	奥山 充

さわやかパートナー法人(18件)

(50音順)

花王株式会社
かながわ信用金庫
ボランティアサークル「ふれあい」
認定NPO法人きらりびとみやしろ
NPO法人COCO湘南
NPO法人さわやかさばえボランティア虹

塩見 治雄	岐阜県	大橋 道彦	大阪府	高知県	水島 孝司
谷口 浩章	遠藤 伸子	久保田 久代	石尾 雄幸	永井 美保	
藤井 宏昌	静岡県	丹下 多榮美	藤田 宣子	福岡県	
山本 千恵	稲葉 ゆり子	京都府	和田 裕	井上 稔信	
湯山 みはる	水野 光江	大江 薫子	兵庫県	岩城 勝正	
新潟県	愛知県	片山 千香子	多田 睦美	小柳 眞澄	
佐藤 英夫	大秋 恵子	中村 純三	安田 隆行	坂田 美代	

NPO法人
さわやかファミリースポーツセンター
JCRファーマ株式会社
初山別村
株式会社シンソフ
住友生命保険相互会社
一般社団法人全国信用金庫協会
認定NPO法人
たすけあいの会ふれあいネットまつど

認定NPO法人東葛市民後見人の会

東友会関東支部ボランティア部会

日本印刷株式会社

社会福祉法人羽咋市社会福祉協議会

浜名湖電装株式会社

NPO法人ふれあい福祉の会山びこへるぷ

一般ご寄付（4件）

（50音順）

伊藤 壽弘（5千円）

氏家 明子（1万円）

小野寺 明子（1万円）

高橋 愛子（2万円）

地域助け合い基金ご寄付（1件）

堀田 力（2千万円）



～ 創立30周年 ～

2021年度
さわやか福祉財団
全国交流フォーラム

日時：2021年11月1日（月）

会場：東京會館（東京都千代田区丸の内3-2-1）

お申し込み締め切り
10月18日（月）

※さわやかパートナー・ご支援者の皆様には、個別にご案内状をお送りしております。

※新型コロナウイルス感染症の状況により、募集人数は変更になります。満員になり次第、お申し込みは締め切りとなりますので、悪しからずご了承ください。

NEWS

& にゅーす



遺贈寄付ウィークで

「遺贈寄付

シンポジウム」開催

堀田会長が講演

2009年から、英国をはじめ欧州、北米を中心とした多くの国で9月13日を「国際遺贈寄付の日 (International Legacy Giving Day)」とし、その前後に遺贈寄付の普及啓発キャンペーンが行われてきた。

日本でも昨年、一般社団法人全

国レガシーギフト協会がこの日を中心とした1週間を「遺贈寄付ウィーク」と位置付け、遺贈寄付の普及啓発週間としての取り組みを始めた。

今回2回目となる同週間（今年は9月11日（土）から17日（金）まで）でも、同協会並びにさまざまな団体が各種イベントを企画した。その一つとして一般社団法人全国コミュニティ財団協会主催、当財団および全国レガシーギフト協会の共催で、9月16日に「遺贈寄付シンポジウム」人生最後の社会貢献『遺贈寄付』を、わたしたちのまちに広げよう」を全国のコミュニティ財団等と協力し15地域で同時開催した。

プログラムは2部構成とし、前半は各地共通内容で当財団の堀田力会長より「遺贈寄付のもつ意義」と題する講演と、全国レガシーギフト協会代表理事の樽本哲氏による「遺贈寄付の考え方と手順」と題する講演をオンライン

にて配信し、後半は各地域による独自企画を行った。

堀田会長からは3点のメッセージを発信した。1点目として、財産を家族に遺したいと思うのが一般的だが、子どもへ遺した場合、子どもの自立を損なうことになるのではないかと、あるいは本人の生活以上のぜいたくをすることにより、子どもの人生を壊すことにならないか。遺す側の責任としてまずしっかり考



当財団が3月に実施した遺贈セレモニー「思恩忌・春」の様子

当財団ホームページ内遺贈寄付ページURL <https://www.sawayakazaidan.or.jp/bequest-donation/>

える必要があるのではないか。

2 点目として、誰にお金を遺すかを考えるとき、亡くなった後も自分の気持ちがいっしょに社会で活かされるような使い方を考えてほしい。それが人間として生を受け、社会の中でわが人生を全うさせてもらった者の責任であり、

権利であろう。コミュニティ財団等中間支援団体も、寄付を得て各種の公益活動をしている団体情報を広く提供してほしい。

3 点目として、では、実際にどこに遺贈するか。遺贈する人も、信用できる団体を探すために情報収集が必要にな

るが、各団体も取り組んでいる活動を積極的に発信する必要がある。

以上の説明の後、活動の概要説明とともに遺贈者への感謝の気持ちを表す一つの例として、当財団作成の動画（財団ホームページで公開中）を紹介した。

（上田 恵子）

さわやか活動日記（抄）

〈2021年7月26日～8月31日〉

情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

総合事業における住民主体の活動の位置づけ等に関する勉強会を開催

〔7月26日・8月18日〕

総合事業における住

民主体活動の位置付け等について、自治体や

生活支援コーディネーターにその選択肢を提示し、自治体がその自治体にとって最適な位置付けを選択できるよ

うにすることによって、住民主体の助け合い活動のさらなる広がりを推進したいと考え、さわやか福祉財団職員の勉強会を開催した。先進自治体等の担当職員にはオンラインで参加してもらった。

開催し、東京都八王子市、神奈川県川崎市、新潟市、大阪市、岩手県花巻市、大阪府太子町社会福祉協議会の担当者、および当財団エグゼクティブアドバイザーの服部真治氏から、B型サービス、D型サービス、一般介護予防事業、生活支援体制整備事業の先進事例を紹介してもらい学んだ。

した。この勉強会の内容を整理し、まとめたものを当財団発行の情報紙『さあ、やろう』で報告する予定。(澤)

「広がれ

ボランティアの輪」 連絡会議

2021年度

「ボランティア・市民活動の推進に関する関係省庁との懇談会」

【8月2日】

東京・霞が関にある全国社会福祉協議会会議室で、「広がれボランティアの輪」連絡会議構成団体および関係者を対象に、会場参加オンライン参加を併用し、「ボランティア・市民活動の推進に関する関係省庁との懇談

会」を開催した。本懇談会は、2001年に国連が提唱したボランティア国際年で培った官民連携の取り組みを発展させるものとして02年から毎年実施してきたものであるが、昨年はコロナ禍のため中止を余儀なくされた。今年度は当財団もメンバーとして参画している勉強会プロジェクトが一から企画を立て、新しい試みとして午前と午後の2部構成で実施。参加者約70名。

午前の部では「孤独・孤立対策におけるボランティア・市民活動の役割」をテーマに、同連絡会議の上野谷加代子会長進行の下、厚生労働省社会・援護局地域福祉課から「地域

共生社会の実現に向けた包括的な支援体制の構築」について、内閣府政策統括官付から「子供の貧困対策」について施策の紹介がなされた。また、構成団体を代表して一般社団法人全国食支援活動協力会の平野寛治専務理事から「多世代の居場所から広がる地域づくり」について実践報告があり、その後、参加者も交えての質疑応答が行われた。

午後の部では「災害への備え、災害対応、

復興においてボランティア・市民活動に期待されること」をテーマに、引き続き上野谷会長の進行により内閣府(防災担当)および厚生労働省社会・援護局地域福祉課からの施策の紹介、続いて構成団体を代表して、震災が

つなぐ全国ネットワークの浦野愛氏より「すぐに行く・そばにいる・長く寄り添う」をテーマにコロナ禍における遠隔支援の取り組み等を含めた活動紹介がなされ、参加者も交え

ての質疑応答を行った。また、各部とも上記のほかには外務省、警察庁、文部科学省国立教育政策研究所社会教育実践研究センター等からもボランティア・市民活動関係の施策の説明が行われ、今後も各省庁とボランティア・市民活動団体が積極的な情報共有・連携を図っていくことの必要性が確認された。(上田)



事務所 だより

●来月の11月で当財団も創立30周年を迎える。仕事のために昔の世の中はこんな考えだったなどといった発見もある。ついでに(?)財団の人たちも当然だが若い、これからも前を向いて頑張りますので、皆様どうぞよろしく願います。

みんなの広場



表紙絵に
懐かしさと安らぎ

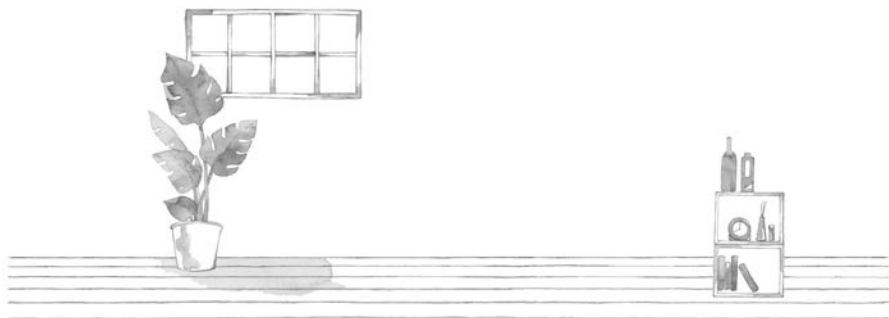
竹腰 曜通さん 66歳

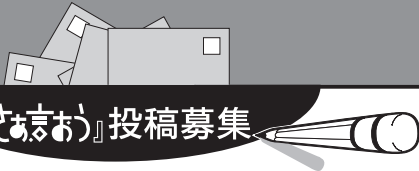
北海道

池田げんえい氏の表紙絵、3歳頃の男女。毎号、懐かしいいでたちの服です。興味深そうな目で何かを追っかけているように見えます。戯れているようにも見えます。「誰もが小さい頃そうだった」ということでしょうか、「何歳になってもこんなふうであれ」ということでしょうか。

「人生100年時代 共生社会の生き方情報誌」をうたう『さあ、言おう』に安らぎを覚える表紙絵です。

私たちもみんな、安らぎを得ています





『さあ、言おう』投稿募集

あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

法人
年会費
(1口)

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります（所得税の寄付控除額の上限は所得の40%－2000円）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵に

はり絵・池田げんえい



「さあ帰ろ」

編集後記 ●「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」にたくさんのご参加ありがとうございました。●「真っ直ぐに、30年」、今月号は清水理事長が書いています（P4～）。●「活動の現場から」は、静岡県袋井市。地域住民とNPOが協働して“薄く広く”支持と寄付を集め、短期間で居場所を立ち上げました（P10～）。●「移住悪くないですよ」は、愛媛県宇和島市の九島から。「島の保健室」で島民と共に生きる野澤美香さんです（P21～）。●財団ホームページが新しくなりました！ぜひご覧ください（P28）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

村上
和雄



所有することを求め続けることをなくし、

互いに助け合って暮らす「つつしみ」の心こそ、

新しい文明像と個々人のライフスタイルを考える上での

キーワードになる。

「つつしむ力」とは、地球という大きな視野の中で

自分が果たすべき役割を意識して行動することだと思います。

●生命科学、特に遺伝子研究の権威として活躍され、本誌2018年10月号「堀田力が聞く 生きざまストーリー」でも遺伝子スイッチONの効果をも多角的に語ってくれました。2021年4月逝去。
(今回のメッセージは、奥様のご許可を得て掲載させていただきます)

幻冬舎発行「コロナの暗号」より抜粋

「あきあき」 10月号

通巻338号 2021年10月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

「地域助け合い基金」で

コロナ禍を乗り越えて共生社会へ



コロナに負けず助け合い活動スタート

新潟県
佐渡市

助け合う地域を目指し、
外出支援、部屋の掃除等の
有償ボランティア活動を開始

ボランティア活動保険加入費用、
消耗品費等を助成

子ども食堂から配食へ

コロナ禍で、
子ども食堂が
困窮家庭に食料を配布

和歌山県
橋本市

食料購入と事務費を助成



皆様のご支援が、地域の助け合いを広げます。
地域助け合い基金へのご寄付を
どうぞよろしくお願い申し上げます。

※詳細は、本文20ページをご参照ください。



公益財団法人

さわやか福祉財団



財団
ホームページ内
基金関連ページ

